

発行  
北海道ポーランド文化協会

〒006-0006  
札幌市手稲区西宮の沢6条  
1丁目16-1-210 佐光方  
電話・FAX 011-215-6696

POLE

第84号 2015. 1. 1  
北海道ポーランド文化協会会誌

samitsu0204@gmail.com  
http://hokkaido-poland.com/

ポーランドに関する  
ご寄稿募集中！  
事務局へご連絡を！

## 〈第71回例会ご案内〉

# カシュブ詩人 ヤロミラ・ラブダ 朗読会



日時 2015年2月5日(木) 18:30～

(開場 18:00)

入場無料、事前申し込み不要  
日本語通訳・解説あり

会場 北海道大学クラーク会館 3F  
国際文化交流活動室  
(札幌市北区北8西7)

お問い合わせ 事務局・佐光まで  
(Tel/e-mai: 上左右を参照)



2015年、北海道ポーランド文化協会のイベントは、カシュブ詩人ヤロミラ・ラブダさんを迎えて詩の朗読会から始まります。ポーランド北部カシュブ地方の文化や言語に触れるまたとない機会です(カシュブ語とラブダさんについては次のエッセイもご覧ください)。

当日は、まずカシュブ語について野町さんのお話、次にラブダさんによるカシュブ語の自作詩の朗読(日本語訳あり)と解説(通訳あり)、最後は会場のみなさんとのフリートークを予定しています。文化・文学の香り高い集まりになるものと、今からとても楽しみです。どなたでもご参加いただける楽しいイベントですので、ぜひお知り合いをお誘いのうえご参加ください。(佐光 伸一)

## カシュブ人とその言語および文学 ～詩人ヤロミラ・ラブダの来日に寄せて～

野町 素己

ポーランド北部のバルト海近くにカシュブ地方と呼ばれる地域がある。ここにはポーランド語に近い言語を話すカシュブ人が住んでいる。その話者数は11万人弱と小規模であるが、方言の多様性が際立っており、20世紀初頭の研究者フリードリヒ・ロレンツは、76の方言に分類している。特にバルト海に面する北部方言は古風な特色を保っており、内陸部の南部方言の話者との相互理解は困難であるとさえも言われる。

カシュブ人の言語が独立した言語か、それともポーランド語の方言かという議論は、研究者、政治家、作家、活動家などによって100年以上にわたり続けられてきた。言語と方言の違いは、言語自体の特徴に基づくだけでなく、政治的な要因、言語に関わる歴史や文化、その担い手の民族意識の問題が多分に含まれる。ポーランドでも社会主義以前には上記の議論が自由になされたが、社会主義時代にはポーランド語の特殊な一方言という扱

いを受けていた。しかし社会主義崩壊後には、ポーランド政府は多言語・多文化政策をとる EU と歩調を合わせ、2005 年、カシュブ語はポーランド政府が行政や教育といった公的領域での使用を認める「地方言語」という地位を得た。つまり今日では政治的にも「方言」ではなく、「言語」ということができるのである。しかし、これはカシュブ語が、大言語がもつ安定した文章語形態を有すことを意味するわけではない。カシュブ語は専ら日常会話で使用され、地域差も非常に大きい。さらに今や全カシュブ人の母語でもあるポーランド語の影響も大きく、カシュブ語は今も文章語形成の過程にある。

カシュブ語の発達において最も重要なのは文学活動である。その端緒はフロリアン・ツェイノヴァ(1817-1881)に見られる。彼は独自の正書法を作り、文学活動を行った。当時、十分な理解を得られなかったため、その活動が結実したとは言いが、後世に大きな影響を残した。カシュブ語で文学作品を執筆する伝統は限定的であったが、ヒェロニム・デルドフスキ(1852-1902)に引き継がれ、さらにカシュブ語の独自性を主張しながらもポーランドとの一体性を重んじる集団「若きカシュブ人」を率いるアレクサンデル・マイコフスキ(1876-1938)によって発展された。特にマイコフスキによる英雄譚「レムスの生涯と冒険」(1938)は、カシュブ語の高度な文

学的可能性を示す最高傑作であり、現在も広く親しまれている。その後、マイコフスキの影響を受けつつ、カシュブの言語と民族の独自性をより強く打ち出した「カシュブ連合」が結成され、地元の教師アレクサンデル・ラブダ(1902-1981)を中心に、文学活動や標準語形成の試みなど多様な活動が行われた。社会主義時代に入ると、ポーランド政府の立場と異なる「連合」の活動は禁止され、その結果、カシュブ語文化は低迷した。それでも「フォークロア」や「方言文学」など様々な表現形式をとり、その言語文化は継承され、中でも詩はカシュブ文学の主要で伝統的なジャンルとして確立し、社会主義時代にも多くの作品が残された。

今回来札するヤロミラ・ラブダ(Jaromira Labudda)氏は、「連合」の指導者であった父アレクサンデルの血と精神を引き継ぐ詩人で、1977 年の文壇デビュー以来、精力的に執筆活動が続けている。また、カシュブ語が公式に認められていない 1990 年代からカシュブ語教育を始めた、いわばカシュブ語復権の先駆者でもある。

日本ではまだ馴染の少ない分野であるが、激動の時代を経験したその知られざる文化の魅力を、ここ札幌で共有できることをうれしく思う。

(のまち・もとき、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター准教授)

〈協力イベント報告〉

## ポーランドの巨匠ニジャウコフスキの アートマイム日本初公演を観て

霜田 英磨

去る 11 月 7 日(金)の晩、東京・両国にあるシアター X (カイ)で初日を迎えた、ポーランドの巨匠ステファン・ニジャウコフスキによる「アートマイム」公演を、劇場のご招待により鑑賞させていただきました。

当日はあいにくの小雨模様でしたが、劇場の入口で、今回出演されるマイム・アーティストの児真順子さんのご両親、児玉さんご夫妻のお出迎えを受けました。この日本初公演は、児玉さんの熱心な働きかけにより、シアター X の主宰者の上田美佐子さんが自ら数回ポーランドへ足を運んで実現されたという経緯は、ニジャウコフスキ氏によるプレゼンテーションの謝辞の中で紹介されました。また、開演に先立ち、2年前にシアター X の中に設立された「日本アートマイム協会」の主宰者 JIDAI 氏からも、児玉さん、上田さんへの謝辞がありました。

プログラムは大きく以下の5部に分かれ、全4時間の長丁場でした。

1. ニジャウコフスキ氏と受講者男女 16 人による公開ワークショップ (舞台上でリアルに実演)
2. 「震える身体」上演 (児真さん出演の短編)



## ラブダさんの詩の朗読を聴いて

小笠原 正明

カシュブ語はポーランド語とは兄弟関係にあるポメラニア語の系統に属する言語で、ポーランドではマイナーな存在のようです。ポーランド語そのものがわからない自分でしたが、ラブダさんの朗読された詩にはポーランド語とは違う何かを感じました。後でお話をうかがうと、感情についてはカシュブ語でしか表現できないことがあるのだそうです。

それで思い出したのは宮澤賢治の詩でした。例えば、「雨ニモマケズ」は標準語で朗読されることが多く、それによってこの詩の持つ精神性が広く理解されています。ところが地元の人々は、標準語で読まれる詩を聞きながら心の中で別の詩をうたうことができるのです。あの地方には、いわゆる「東北弁」とも違う独特のイントネーションがあって、それでよむと、「高等農林」出の若い先生が、貧しい農家の子供たちに向かって語りかけるときの、あふれるような「感情」が伝わってきます。宮澤賢治は、この二重性を意識して、どちらの面においても完璧な詩を作りました。生前に未発表だったのは、よほど時間をかけて推敲していたからではないでしょうか。

このような想像をたくましくしながら、私はポ文協以外では経験できそうもない、カシュブ語の詩の朗読を楽しむことができました。（おがさわら・まさあき）

## カシュブ詩人 ヤロミラ・ラブダ 朗読会



日時 2015年2月5日(木) 18:30-20:00

会場 北海道大学クラーク会館 3F

国際文化交流活動室

参加者 20人超

## プログラム

- ◆カシュブ語概説：野町素己（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター准教授）
- ◆朗読（カシュブ語）と解説（ポーランド語）ヤロミラ・ラブダ、朗読（日本語）越野剛、通訳：佐光伸一
- ◆質疑応答（フリートーク）

**ヤロミラ・ラブダ**(Jaromira Labudda, 1961-) ポーランド北部・リニア郡トゥウチェヴォ在住の詩人。ポーランド語、カシュブ語の教師。地元の学校で教鞭をとり、郷土文化の教育プログラムにも携わる。著名な作家だった父アレクサンデルの影響で幼時より文学に親しみ、1977年に詩人デビュー。『現代カシュブ文学』(1986)や2冊の詩集を出版。グダンスクのメディアで多くの詩を発表。音楽バンド「レシュチェ Leszcze」がカシュブ大会で演奏し、ポーランド全土で知られる曲「妻たちの問題」を作詞。ワルシャワ大学、英国・ケンブリッジ大学、オックスフォード大学のために自身や父の作品を録音。カシュブ語教育のパイオニアで、1990年代に最初のカシュブ語教科書を作成、カシュブ語教師向けのコースを運営。1999年に国家教育省から地域教育功労章を受章。

**ヤン・トレプチク**(Jan Trepczyk, 1907-1989) ポーランド北部・ミラホヴォ村近郊スタリシヤ・ブダ出身の詩人。地元で学校の教師を勤めつつ、アレクサンデル・ラブダ(Aleksander Labuda, 1902-1981)とともに「カシュブ連合」の活動家としてカシュブ言語文化の発展に一生をささげた。

## 【カシュブ語】

Jan Trepczyk  
Kaszëbskô mòwa

Tczëwôrtńô jes jak dziejów duch,  
Co w tobie sã przezërô,  
Bò slôdë wdôr i rodny chùch  
Wespól z tobą ùmiérô.  
  
Tczëwôrtńô jes jak naju gón  
Do widu ě do słuńca.  
Të szerok mdziesz brzëmia jak zwón  
Na wiedno ě bez kùńca.

Skażoną miół ce, wej, cëzyńc  
I znikwic chcôł do nédzi,  
Le më cë dómë w pałac przinć  
I w pierszë sadnąć rédzi.

Ò, mòwò starków! Nad twój zwãk  
Nick lepszégò nicht ni mò!  
Jô lubiã ce, móm ò ce lãk,  
Ce stracëc strach mie zjimò.  
  
Jô ùkòchôł ce jak no brat  
Widzałosc zaczarzoną.

Òd małoscë do stòrëch lat  
Jes dlô mie namienioną.

W ce dëch, zarzekłô dësza je  
I serce naji lëdu.  
Ze zgardë më ce dwigniëmë,  
Rozwicô doždôs cëdu.

Ò, mòwò starków! Më ce w strój  
Òbleczëmë bûszny,  
Że mdziesz sklënia jak gwiondów trój,  
Jak słuńca wid pësny!



【ポーランド語】

Jan Trepczyk  
Kaszuńska mowa

Czcigodna jesteś jak dziejów duch,  
Który w tobie się przegląda,  
Bo ostatnie wspomnienie i ojczysty  
oddech  
Razem z tobą umiera.

Czcigodna jesteś jak nasz pęd  
Do światła i do słońca.  
Ty szeroko będziesz brzmiała jak  
dzwon  
Na zawsze i bez końca.

Skażoną miał cię, oto, obcy  
I zniszczyć chciał do reszty,  
Lecz my ci damy do pałacu przyjść  
I pierwsze zająć rzędy.

O, mowo przodków! Nad twój dźwięk  
Nic lepszego nikt nie ma!  
Ja lubię ciebie, o ciebie się lękam,  
Cię stracić – strach mnie ogarnia.

Ukochałem ciebie jak brat  
Wspaniałość zakłątą.  
Od dzieciństwa do starych lat  
Jesteś mi przeznaczoną.

W tobie duch, zakłąta dusza jest  
I serce naszego ludu.  
Z pogardy cię wydzwigniemy,  
Rozwoju doczekasz cudu.

O, mowo przodków! My cię w strój  
Odziejemy dumny,  
Że będziesz lśnić jak liczne gwiazdy,  
Jak piękne światło słońca!



ヤロミラ・ラブダさん

【日本語】

ヤン・トレプチュク  
カシュブの言葉

おまえは気高い／自らに映りこむ歴史の精神のように／最後の記憶とふるさとの吐息は／おまえとともに果てるだろうから

おまえは気高い／光と太陽へ向かう私たちの衝動のように／おまえは響きわたることだろう、鐘の音のように／永遠に、いつまでも

ところがどうだ、よそ者がおまえを汚した／完膚なきまでに打ちのめそうとした／だが私たちはおまえを宮殿に呼びまねき／最前列に座らせるのだ

おお、先祖たちの言葉よ！おまえの音に／優るものを、だれも持ちはしない！／おまえが好きだ、心配なのだ／おまえを失うのではないか — わたしは恐怖にとられる

兄のようにわたしはおまえに惚れこんだ／魅惑的な見事さを／子どものころから、老いるまで／おまえはわたしの運命の存在

おまえのうちに魂が、魅惑的な魂があり／そしてわたしたちの民の心がある／わたしたちは蔑みからおまえを救いだし／おまえは奇跡の発展を遂げるだろう

おお、先祖たちの言葉よ！わたしたちはおまえに／誇らしい衣装を着せてやろう／あまたの星のように、美しい陽光のように／その輝きを誇れるような衣装を！

Jaromira Labùdda  
Rôczba

Sadnij dzys so ze mną na westrzódku  
lata,  
Tuwò kòle skòczka, naprocëm te  
mlécza,

Dze kléwer trzë razë na palcach  
òdliczò,  
Ò szczescë sã pitò stòrëgò dmùchawca.

Tu trôwa pòwiòdò ò bestrëch  
gòdzynkach,

Wanożnikach-skòczkach, mòtilach  
robòcëch,  
Szustowatëch mëgach, ò tajemny dòce.  
Przësłëchòj sã chwilkã, sadnij tu  
përzinkã.

Zelonoscë walë sã brzątwią w ògròdkù,  
Grządkòwi domòcy zybùją sã w szëkù.  
Widny parmiń słuńca cziwie do nich z  
bòkù.

To lato je we mie. Sadnij na  
westrzódku.

Jaromira Labudda  
Zaproszenie

Usiądź dzisiaj ze mną na środku lata,  
Tutaj koło świerszcza, naprzeciw tego  
mlecza,

Gdzie koniczyna trzy razy na palcach  
odlicza,  
O szczęście pyta starego dmuchawca.

Tu trawa opowiada o pstrych  
biedronkach,  
Wędrowcach-świerszczach, motylach  
pracowitych,  
Zawadiackich komarach, o tajemniczej  
mgłę.  
Przysłuchaj się chwilkę, usiądź tu  
troszeczkę.

Fale zieleni się kłębią w ogródku,  
Grządkowi domownicy kołyszą się w  
szyku.

Jasny promień słońca kiwie do nich z  
boku.  
To lato jest we mnie. Usiądź na środku.

ヤロミラ・ラブダ  
招待

今日わたしといっしょに夏の真ん中に  
すわってみて。／コオロギが近くに  
いるここ、ノゲシのむかいに。／三ッ葉の  
クローバーが指折り数えているところ。  
／それは年をとったタンポポに、幸せ  
について尋ねているの。

ここで草が話しているの、まだらのテン  
トウムシについて。／旅をするコオロギ  
について。働きものの蝶々について。  
／生意気な蚊について。ふしぎな霧に  
ついて。／ちょっと耳を傾けてみて。ち  
よっただけここにすわってみて。

緑の波が庭でうずを巻いている。／畑の畝の住人が一列になってゆれている。／まぶしい陽の光が彼らにむかって手をふっている。／夏はわたしのなかにある。真ん中にすわって。

Najé przedstawienie

Wiele to ju razy przeszedł górny wiat! Wiele dej ôpadlëch je ju pòdeptónëch! Co sztót jinaczony nóm sztòłt krajnë nieba, Darga przeszechniãtò drzewiecem złómónym.

Wiele plëtów przinãdze ôbchôdac pòslëszno I zamknãwszë ôczë przed sztychama gradu Ômëlëcã szëkac nédzi cwiardi ùrmë! A kawel na sztëkã nowim deszczem padô.

W dôce zatarczoné mdã niegwësné kroczi. Ani sã zatacëc, ani ùceć z zemi. Wnet sã zaskrzã widë na żëcowi binie. Czë bãdze bisowé najé przedstawienie?

Nasze przedstawienie

Ile to już razy przeszedł złośliwy wiatr! Ile idei opadniętych jest już podeptanych! Co chwilę zmieniany nam kształt krainy nieba, Droga przekreślona drzewem złamanym.

Ile kałuż przyjdzie obchodzić posłusznie I zamknawszy oczy przed ciosami gradu Potajemnie szukać resztki bezpiecznego pagórka! A los na przekór nowym deszczem pada.

We mgłę zasłonięte będą niepewne kroki. Ani się schować, ani uciec z ziemi. Wnet zabłysną światła na życiowej scenie. Czy będzie bisowe nasze przedstawienie?

わたしたちの出番

悪意ある風がいったいもう何度、吹きつけたことだろう。／地に落ちた理想がいったいもう何度、足踏みにされたことだろう。／目の前に広がる空の国は刻一刻とすがたを変え、／道は折れた樹々にふさがれ、見えない。

いったいいくつの水溜りを従順に避け、／あられの攻撃の前に目を閉じたまま、／安全な丘をこっそりと探すことなどできるのだろうか！／運命が、こちらに向かい、新たな雨となって、降りかかってくるというのに。

おぼろげな足取りは霧に包まれ、／地からは隠れることも、逃げることもできない。／やがて人生のステージに、ライトがともるだろう。／わたしたちにアンコールの出番はあるのだろうか。

Testameńt lata

To nic, że lato ôdchôdô. Ôno nazôd przinãdze, Bò wszëtëkô gwëсно wrôcô, co z serca ôddóné, Chôc swietlik sã dopôłô testamëntem słuńca I czas pò prosti drodze przechôdô zaspóny.

Ju noc cygnie za sobą corôz dlëgszë snicé, Pajk nawlôkô nitkã na jiglã chòjnowã. Mrzonka w jesëń ôdchôdô, sztót sã zdradli w rzëce. Czë jész wstąpi w czas przeszli rojita latowô?

Testament lata

To nic, że lato odchodzi. Ono przyjdzie z powrotem,

Bo wszystko z pewnością wraca, co z serca oddane, Choć swietlik się dopala testamentem słońca I czas po prostej drodze przechodzi zaspany.

Już noc ciągnie za sobą coraz dłuższy sen, Pająk nawleka nitkę na igłę sosnową. Mrzonka w jesień odchodzi, chwila się przegląda w rzece. Czy jeszcze wstąpi w czas przeszły letnie marzenie?

夏の遺言

夏が過ぎ去ったとしても、かまわない。それは戻ってくるから、／心からゆだねられたものはすべて、きっと帰ってくるから。／たとえ蜚が太陽の遺言となって燃え尽き、／時がまっすぐな道を通り、眠たげに過ぎ去っていったとしても。

すでに夜は、ますます長い眠りをたずさえ、／蜘蛛が松の針に糸を通して。／秋の夢は過ぎ去り、つかの間の瞬間は河に映った自分の姿を眺める。／夏の夢はもう過去のものとなろうとしているのだろうか？

To bëło

To bëło jak piesniô wieczornô nad łakã, Jak jeden krok walca i wir, co sã wzmôgl, Na sztòłt gitarzistë, co w strëna rôz brząknął I pãkła na strëna, i zadza ô próg.

To bëło jak dokôz, co w rimë sã sklôdô. Je himnem, môdlëtwã, lëtaniami twich dniów. I swiãti dzël dëszë bës za nie zaprzëdôł, Jãz doczëjesz w kuńcu, że nie bëło słów.



朗読会参加者とともに  
(写真：尾形芳秀)

To dobrze, że piosniô są czasem ურიwô,  
 Jak dobrze, że mészle mólczênkem są  
 skrzą,  
 Bò nierôz melodia nóm fałsze węgriwô  
 I są taczé słowa, co kòlèbiąc, lżą.

To było

To było jak pieśń wieczorna nad łąką,  
 Jak jeden krok walca i wir, który się  
 wzmógł,  
 Na podobieństwo gitarzysty, co w  
 strunę raz brzdąknął  
 I pękła ta struna, i zawadziła o próg.

To było jak dzieło, które w rymy się  
 składa.  
 Jest hymnem, modlitwą, litanią twych  
 dni.

I świętą część duszy byś za nie  
 zaprzedał,  
 Aż dosłyszysz w końcu, że nie było  
 słów.

To dobrze, że pieśń się czasem urywa,  
 Jak dobrze, że myśli milczeniem się  
 iskrzą,

Bo nieraz melodia nam fałsze wygrywa  
 I są takie słowa, które kołyszac, kłamią.

そうあった

それは、草原でのタベの歌のよう、/  
 ワルツの一步のよう、力を増した竜巻  
 のようだった。／まるでギタリストが弦  
 をかき鳴らし、／弦が炸裂し、敷居に  
 ぶつかっただかのように。

それは、韻律で構成された作品のよう  
 だった。／それはあなたの日々の賛  
 歌、祈り、連祷。／それらのために、お  
 前は魂の聖なる部分を、捧げたのかも  
 しれない。／結局は、そこに、ことばな  
 どないことを聴きとるまでは。

歌が時に途切れることはいいことだ。  
 ／まるで沈黙により、思考が火花を発  
 することがいいことであるように。／と  
 いうのもメロディは一度ならず、わたし  
 たちに偽りを奏で、／嘘を宿すことば  
 もあるのだから。

※ ポーランド語: ヤロミラ・ラブダ訳  
 ※ 日本語: カシュブの言葉、招待  
 (野町素己訳・小椋彩協力)、わ  
 たしたちの出番、夏の遺言、そう  
 あった(佐光伸一訳)

北大祭 インターナショナルフードフェスティバル(IFF)2015 に出店

## 手作りのポーランド料理はいかがですか!

6月4日(木)～7日(日) 9:00～21:00

※ 木曜は 12:00～、日曜は～17:00

※ 土日は混雑が予想されます。ポーランド人とのおしゃべり  
 & 展示を楽しむなら、平日がオススメ!



北大祭で 2010 年から恒  
 例の、ポーランド人留学生  
 のお店(テント)を今年も出  
 します。

北大祭は毎年6月最初  
 の週末、市民の皆さんをお  
 迎えて、クラスやサークル  
 の皆さんがさまざまなお店  
 やイベントを催します。

留学生も、インター  
 ナショナルフードフェ  
 スティバルとして、たく  
 さんのお店で自分の  
 国の料理を出します。

普段日本では食べ  
 られないおいしいポー  
 ランド料理を、ぜひ食  
 べにきてください。



北海道大学ポーランド人留学生会  
 協賛: ポーランド広報文化センター  
 後援: 北海道ポーランド文化協会

総合博物館 (北区北10西8)  
 付近に出店予定